動物いろいろ

高野敦志

目次

はじめに 1
最初で最後の旅 3
四季の森公園と蛍 5
中津川渓谷と宮ヶ瀬湖 9
丼に入っていたのは？ 14
カラスの子 16
ぼくがイヌ派だった頃 20
プレーリードッグのキョロ 83
フクシマから来たウサギ 93
岩合光昭の「ねこづくし」 100

映画『ボブという名の猫』　106
アニメ『ルドルフとイッパイアッテナ』　109
小さな子猫　112
猫の耳　115
野良猫も楽じゃない　120
行き倒れの猫　124
猫の家出　127

表紙　在りし日の大五郎

はじめに

私小説作家の尾崎一雄には、「虫のいろいろ」という短編がある。語り手が一人称の私で、天井の蜘蛛を眺めたり、瓶や窓の隙間に蜘蛛を閉じ込めたりする。梶井基次郎の「冬の蠅」を連想させる小説である。病気がちだった尾崎は、梶井と似たような心境だったのだろうか。

　自分も動物について書いてきたものを、まとめて一冊にしてみようと思った。虫や鳥などは前の方に、長い間飼っていた犬は中ほどに、その後に飼った猫などは、後半に置くことにした。相互には必ずしも関連がないので、雑多な印象がないわけではない。そこで、尾崎一雄にならって、作品集を『動物いろいろ』

と名づけた。

二〇二〇年六月十一日

髙野敦志

最初で最後の旅

夏の終わりの昼下がり、駅のホームでセミが仰向けになって転がっていた。六本の足を縮めてじっとしている。死んでしまったのかと触れたら、足をばたばたさせている。起き上がれないのだろうと思い、向きを直してホームに置いたら、元気よく飛んでいった、……と思ったら、僕の体にぶつかってしまった。

もしかしたら、恩人だと思って好意を抱(いだ)いたのか。ただ木か何かと勘違いしただけなのか。どこかに行ってしまったようなので、来た電車に乗り込んだ。しばらくして、何かがごそごそ動いている。何と先ほどのセミが肩に乗ってるじゃないか。セミもまさか、一生の最後に見知らぬ土地に連れて行かれるとは、

思ってもみなかっただろう。

　住宅地の間を電車は走っている。このまま都心に連れて行かれたら、止まる木もないだろうから、まだ緑が散在する次の駅で降りて、ホーム端の金網に止まらせた。すぐに飛んでいくかと思ったら、ずっと止まっている。次発の電車に乗り込み、車窓から覗(のぞ)くと、やっぱり止まっていた。そのあと、セミはどうしたんだろう？

四季の森公園と蛍

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁(かり)につげこせ

『伊勢物語』の四十五段に、好きな男への思いを伝えられずに病(や)んだ娘が、知らせを受けて男が駆けつけたときには、すでに事切れていたという話がある。男は亡くなった女を思いながら、夏の夜空を飛ぶ蛍を見て、雲の上まで行ったら、秋風が吹くと雁に告げてほしいと詠(よ)んだ。

　蛍や鳥は空を飛ぶところから、古代人は魂の行方(ゆくえ)を知っていると考えた。蛍そのものを、死者の霊そのものとみなしていた節(ふし)もある。日本人が今でも蛍に特別な思いを抱くのも、いにしえ

からの宗教観が、無意識の中に刻み込まれているからだろう。
　高度経済成長の頃から、都市近郊では蛍が姿を消した。小川には町の汚水が流れ込むようになり、きれいな水がなければ生息できない蛍は、都市の住民にとっては幻のような存在になってしまった。
　その後、下水道の普及が進み、河川にも魚が戻ってきた。小川もかつての清流がよみがえり、蛍の幼虫の餌になるカワニナが放流されるようになった。春の花見、秋の紅葉とともに、ようやく夏の蛍も我々の手の届くところに帰ってきた。
　では、どこで蛍と出会えるのだろうか。今回は横浜市緑区と旭区（あさひく）にまたがる、四季の森公園を紹介することにする。公園

として整備開放されてから、四半世紀経っている。横浜線の中山駅から、徒歩十五分程度である。近くには「よこはま動物園ズーラシア」がある。
　ゲンジボタルは六月、ヘイケボタルは七月に現れる。公園の中には電灯がほとんどないから、女性は男性にエスコートしてもらった方がいいだろう。これくらいの薄暗さがなければ、ほのかな光を目にとらえることはできない。しかし、次第に目が慣れてくると、雲に反射するわずかの光だけで、足下も数メートル先も見えてくる。
　蛍は公園の奥、小川にほど近い斜面の木々に多くいる。葉の表面に留まったまま、わずかな光を出し続けるもの。遠目で見えるほどの緑の幽光を、小さな体で渾身（こんしん）の力をもって、飛び続

ける間放っているもの。
あの光はオスとメスの通信だと言われているが、果たして物を見るのに使っているのだろうか。お尻が光っていては、前がよく見えないだろうし、仮に頭が光っていたら、目がくらんでしまうに違いない。
それにしても、わずか二週間足らずで死に絶えるはかない命は、子孫を残すための交尾にだけ費やされるのかと思うと、自然の中での性の尊さが胸に迫ってくる。

中津川渓谷と宮ヶ瀬湖

昔々のその昔、すっかりオヤジになっちまった僕が、まだ若かりし中学生だった頃、遠足で中津川渓谷を訪れた。中津川というのは、神奈川県中部を流れる相模川の支流で、県内唯一の村である清川村のあたりを、川に沿って下っていったのである。梅雨入り前の晴れた日で、新緑のトンネルから見え隠れする光を浴びながら、森の放つ生命力に生きる喜びを感じていた。僕自身もようやく思春期にさしかかり、体の中からあふれる力を抑えられずにいた。僕らは自然に祝福されているようだった。
ゴール地点の小屋に到着すると、崖の上にラインが引かれていた。近い将来、渓谷にコンクリートの壁が作られ、大きな人

造湖が誕生するという話だった。そんなことは僕らにはあんまり関心がなかった。じゃあ、今歩いてきた道も、みんな水の底になってしまうのか。崖に引かれたラインというのは、湖水の水面の位置を表していたのである。

それから三十年以上の月日が経った。晩秋のある週末の午後、僕は友人の車で、かつて歩いた道が水底（みなそこ）にある宮ヶ瀬（みやがせ）湖に向かっていた。厚木（あつぎ）から山地に向かってひた走り、中津川沿いの道を進む頃には、空はすっかり曇ってしまった。湖に沿う道をいくつものトンネルをくぐっていく。どんよりしているせいで、湖水の色は深い淵のように濃緑（こみどり）によどんでいる。中学生だった僕が歩いた道、温かく迎えてくれた山の木々も、皆湖底に呑み込まれてしまったのか。中学生の時に漠然と感じたことが、現

実の重みとなって僕の心を圧していった。失われた青春が封じられている気がしたからだ。

湖畔の駐車場に車は到着した。薄ら寒くて、人影はほとんど見られなかった。山は美しく紅葉することなく、葉は茶色く枯れてしまっている。湖上に架かった吊り橋を渡っていった。欄干には豆電球がついているから、イベントの時などにはライトアップされるのだろう。しかし、この地もすでに観光地として、人々を惹（ひ）きつける若さを失っていた。

宮ヶ瀬湖水の郷交流館に入ってみた。ここは歴史や生活文化を紹介する郷土資料館である。竹で編んだ笊（ざる）や蓑（みの）、山仕事に使う鋸（のこぎり）、釣り道具などが展示されている。歴史に関する説明に

も目がいった。中世になるとこのような山奥でも、寺院の堂宇（どうう）が建てられるようになったという。江戸時代は天領（てんりょう）だったようだ。
　外に出ると白い綿毛に似たものが、無数に宙を舞っていた。まさか粉雪が降ってるわけでもなかろうに。
「あっ、雪虫（ゆきむし）だ！」
　北海道出身の友人が叫んだ。白い綿のように見えたのは、頭も足もついたれっきとした生き物だった。
「この虫が空を漂うのを見かけると、決まって雪が降り出すんだよ」
　井上靖（いのうえやすし）の幼少時代を描いた作品に、『しろばんば』という小説がある。曾祖父（そうそふ）の妾（めかけ）だったおばあさんと少年が、伊豆の山

奥の土蔵で暮らしている話だが、その題名となった「しろばんば」を、北海道では雪虫と呼んでいるらしい。雲の垂れ込めた晩秋の湖畔で、唯一、僕を慰めてくれる光景だった。友人の心は遠いふるさとの、遠い思い出に満たされていた。

丼に入っていたのは？

うちの猫が家出したことがあった。寒い季節に三日三晩、野宿をしたのである。パニックになって、うちの中に戻ろうにも戻れなくなった。そこで、えさと水を屋外に置いて、飢えと渇きに備えることにした。

幸い、庭で動けなくなっているところを、妹の手で保護された。玄関脇に置いた丼の水は、片づけてしまってもよかった。ただ、うちの周り（まわ）には野良猫がよく来る。食べ物はもらえても、水を探すのに苦労すると聞いていたから、そのまま丼に水を入れておくようにした。

ある夏の夜、僕は丼の中を覗（のぞ）いて仰天した。初めは大きな枯

れ葉が入っているんだろうと思った。しかし、何だか厚みがあって盛り上がっている。まさか、野良猫が丼の中に糞をしたのではないか。水をあげていた恩を仇（あだ）で返す気かと思った。

次の瞬間、ぎょっとした。茶色い糞の塊（かたまり）が動いたからである。よく見ると、それは大きなガマガエルだった。庭に池があるわけでもないのに、どこからやってきたのだろう。余りの暑さに、丼に入って水浴びしていたのである。

ガマの油といえば、ガマガエルの体表の分泌液（ぶんぴつえき）を集めて作ったとされる軟膏で、香具師（やし）が怪しげな口上（こうじょう）で売っていた代物（しろもの）。傷薬と称していたわけだが、毒物としての作用があり、ブフォトキシンには幻覚作用があるとされる。僕はガマガエルに化かされていたのだろうか。

カラスの子

野口雨情(のぐちうじょう)作詞の童謡に「七つの子」がある。母が子を思う気持ちをカラスに託した詩を、本居宣長(もとおりのりなが)の子孫、長世(ながよ)がほのぼのとした味わいの歌に仕立てたものである。幼い頃、うちにあったオルゴールが奏(かな)でていた曲で、今でもかわいいメロディーが耳の底に残っている。

烏(からす)　なぜ啼(な)くの
烏は山に
可愛い七つの
子があるからよ

この童謡の替え歌が、僕の若い頃に流行(はや)っていた。「烏　なぜ啼くの　烏の勝手でしょ」というもので、元の曲に比べると、干渉を嫌う現代人のすげなさを示していて、当時の自分も呆気(あっけ)に取られたものである。

雨情の抒情的な歌詞の中で、一つ疑問に思ったのは、「七つ」が七羽を表すか、七歳を表すかということである。カラスが七羽も子を育てるのかという疑問。育てるとしても、なぜ数詞を間違えたのか。宮沢賢治も『銀河鉄道の夜』の中で、鳥を「二十疋(ぴき)」と書いているから、数詞の間違いは珍しいことではない。カラスは「七歳」では立派な成鳥であるから、「七つ」は「七羽」ととらえた方が妥当ではないか。

ところで、何で烏の話をしているかと言うと、以前、妹がカラスの子を道で拾ってきたことがあるからだ。その子は顔が小さくて、まだ産毛（うぶげ）が生えていた。そのくせ、ずんぐりしてクチバシが大きい。ぴよぴよ啼いているところが可愛らしかった。水やパンをやっても動かない。こわがっているのだろうか。

そのうち、階段を見つけて、ぴょこん、ぴょこんと二階まで上ってしまった。恐らく、親を捜（さが）しているんだろう。そのとき耳によみがえったのが、童謡「七つの子」だった。外に出たがっているのは明らかだし、カラスの母に返してあげたくなった。一方、人間の母の方も、こんなに元気ならうちに置いておけないと言うので、悲しげな妹を説得して、元いた団地にあった餌

台に載せてきた。

しばらくして行ってみると、雛（ひな）は団地の庭からぴよぴよ啼きながらついてきた。後ろ髪が引かれたが、逃げる雛をつかまえると、また餌台に載せて帰った。そこなら猫などにつかまりにくいと思ったからだ。

夕方、再び見に行ったが、すでに雛の姿はどこにもなかった。果たして、どうなったんだろう？

ぼくがイヌ派だった頃

一

ぼくが飼っていた犬の話をしよう。初めて飼ったのは、黒くてお腹が黄土色の犬。シェパードの雑種だったようだ。名前はクロ。物心がつく前からうちにいて、植えたばかりの柴の木の庭で、一緒に走り回ったものだ。

でも、クロの方からしてみれば、ぼくは弟みたいなものだった。幼児のぼくは散歩に連れていけない。首輪につけたリードをつかんでも、ぐいぐい引っ張られて、転びそうになってしま

う。走り出すと開いた口から鋭い歯が見え、激しく息をするさまを見ると、ちょっとこわい気もした。オオカミの野生がまだ残っていたのか。

その当時、家の東の窓からはなだらかな丘陵が見えた。今は灰色の団地が建ち並ぶあたりも、子供たちが駆け回る自然の庭だったのだ。牧歌的な空気の中でぼくは生きていた。自然が豊かなだけではない。夢と現実の境があいまいで、瞬時のイメージは残っていても、どんな具合につながっていたか分からない。

やがて、ぼくにも妹ができたのだが、赤ちゃんは大人の男女が一緒にいるだけで、自然に生まれてしまうぐらいに思っていた。うちの前の道も舗装（ほそう）されておらず、砂利（じゃり）が一面に広がってて

いた。しかも、坂道だったから、大雨が降ると、川の流れのようになってしまうのだった。

雨が上がった日、砂利道を隔てた段々畑の間を、妹の手を引き登っていくと、両側に灌木（かんぼく）が茂る一本道へと出た。モミの木の兄弟が偉そうな顔して立っていた。周りにはカシやクヌギも生えていたが、モミの木の三本ほど力強く根を食い込ませ、こずえから遠く先まで見下ろしている巨木はなかった。あれはこの丘を守る神さまなんだ、と子供ながらに思ったものだ。

モミの木の脇を過ぎると、ふいに前方の視野が開け、草の生える平坦な台地が、はるか彼方の崖まで伸びていた。西側のゆるやかな斜面には畑が広がり、落ちたらやばい肥だめもあった。ススキがなびく原っぱも、歩き回ると所々、塹壕（ざんごう）に似たくぼみ

があって、風の強い日には隠れ家（が）や、お握りを頬（ほお）張るための縄張りとなっていた。

ほがらかな早春の一日だった。地面のあちこちからはつくしが頭を出し、時折吹き過ぎる風が、むきだしの畑の土を舞い上げた。妹とふざけ合っていると、クロを連れた父に、お弁当を持った母が後からやって来た。

ぼくらはくぼみの一つで、ひなたぼっこをしていた。父が首輪からロープを外すと、クロは勢いよく原っぱの上を駆け出した。ぼくは追いかけたのだが、いつの間にか追いかけられていた。クロは逃げ回るぼくを、獲物と間違えたのか。いや、そうやって年下のぼくをあやしてくれていたのだろう。

走ってくたくたになると、枯れ草の上にしゃがみ込む。すると、父がこっちへ来い、とぼくのことを呼んだ。仰向けに寝ていた父は、両腕と両足を真上に向けてから、その上に乗っかれ、と言う。足の裏にお腹を乗せると、父はぼくの肩をしっかりとつかんだ。

「おい、両手を広げるんだ！」

ぼくは飛行機になっていた。自分の頭の中では、プロペラがブルブルうなっている。ぼくはおなかがくすぐったいのと、空中に自分の体が浮いたのとで、けたけた笑い声を上げていた。それを目にした妹は、おにいちゃん、ずるい！と泣きそうな顔して、早く替わってくれるようせがむのだった。

ちょうどその時、本物のエンジンの音が、南の稜線（りょうせん）からし

てきた。地面に下りたぼくは、ブルブルいう正体を見きわめに走り出した。真っ青（さお）な空の中央を、白いボディーに赤いラインのプロペラ機が、川の対岸へ向かって飛んでいく。追いつけずに転んだぼくは、父と同じく仰向けになり、空の全体を見開いた目でつかんでやろうとした。差し入った光に目がくらんだ途端、忍び寄ってきたクロはすかさず、ぼくの頬を大きな舌でペロリとなめた。

この広場も梅雨（つゆ）が明けるまでには、一面青草の絨毯（じゅうたん）と化した。夏のまばゆい光が照り付けても、緑に覆い尽くされた台地は、吹き過ぎる風のために涼しかった。近所の子供たちの楽しみは、ぐるりと囲む林を探検することだった。そこには妖精の

装いをした青いツユクサの花や、大人は見向きもしないカタバミ、オオバコなどの野草が、枝と枝の間に出来たわずかのひなたで、慎ましげに光を浴びているのだった。

　大人の背丈ほどもあるキイチゴの木には、トゲのある茎のあちこちに、黄身（きみ）の色した虫の卵に似た粒々が、可愛い鈴みたいになっていた。数分も摘まないうちに、竹の籠（かご）は宝石に見える実でいっぱいになっていた。丘の下にある小川で洗うと、ぼくらは先を争って口の中に放り込んだ。果汁を包む膜が破れて、酸っぱさに思わず飛び上がったものだ。

　ここへはザリガニを捕まえに来ることもあった。川岸の草につかまって底へ下り、辛抱強く水が澄むのを待ったところで、泥の中でじっとしている奴へ、そっと指を伸ばしていくのだ。

レンガ色の鎧（よろい）をまとっていて、外見より敏捷（びんしょう）な動き方をする。ジェット噴射するように、尾の方から濁り水の中に身を隠してしまう。不用意に手を触れる者には、自慢のハサミという武器を用意して。

　夏も終わりに近づき、うだるような暑さが和らぐと、母に連れられ丘の外れにある谷間へ出た。狭い下り坂の両側には、樹齢数百年の杉の並木が日陰を作り、ひんやりする霊気を漂わせていた。ささくれた樹皮の面には、ヒグラシが止まっており、物悲しい弦楽器の音を響かせていた。

　うねるような脇道を進むと、納屋（なや）の奥には藁（わら）ぶきの農家が現れた。縁側の戸はすべて開け放たれ、古い柱のそばでは頬かぶ

りをし、藍の着物にもんぺを履いたおばあさんが座り、キュウリの棘を削り落としているのだった。庭先では卵を採るための茶色の鶏のほか、白い体に黒く立派な尾羽を立てたチャボも、地面にまかれたえさをついばんでいた。その日、母はもいですぐのキュウリとナス、産み立ての卵を譲ってもらいに、知り合いのお百姓さんを訪ねたのだった。

「野良さ出かけて、誰もいねえんだ」

　おばあさんは太い枝を切っただけの杖をつき、ただでさえ曲がった腰を、さらに「つ」の字に折って、庭の陰や庭石の後ろなど、鶏が卵を隠しそうな所を見ては、一つ一つ竹のザルに集めていった。

「ほら、触ってみい」

　脇からのぞき込んでいたぼくは、渡された温かい卵を、落とさぬように掌で包むと、頬にも当ててみた。そのおばあさんも、ほどなくして亡くなり、藁葺きの家も田畑が高く売れたおかげで、成金趣味のお屋敷に建て替えられた。クロと走り回った丘も造成されて、今では団地が建ち並んでいる。

　ぼくの幼年時代は、あの楽園が失われたとき、そして、クロがいなくなったときに終わった。今では脳裏にしか存在しない、夢と現実が交錯する幸福な時期を、ぼくは長らく忘れていたような気がする。

　いつも元気に駆け回り、リードを持ったぼくを振り回していたクロだが、いつの間にか病に冒されていた。犬の六歳と言え

ば、人間なら働き盛りの中年ぐらい。今なら十五年以上生きることも珍しくないが、当時の犬の多くは番犬で、防犯のために屋外で飼われていた。しかも、狂犬病の予防注射くらいで、病気がひどくならなければ、獣医にも連れていかなかった。

　ひなたぼっこをさせるために、クロは物干しの柱につながれていたが、まっすぐ立っていることも難しかった。足の力が抜けてしまい、股（また）を裂くように足が広がってしまうのだ。ぼくは何が起こったのか分からず、母に聞いてみることにした。

「クロはね、病気なの」

　それがどんな病気であるのかは、まだ知らされていなかった。話されても分からないだろうし、ぼくがショックを受けるのを恐れていたのだろう。

　しばらくして、クロの姿は見えなくなった。もはや立っていることができず、犬小屋では雨風を避けることができないことから、物置に移したということだった。

「クロのことが見たい」

　病気が良くならないのは感づいていたが、母が何を恐れているのか分からなかった。ぼくには元気なクロの姿しか、思い出の中に残さないように計らっていたのだろうか。

「だめよ」

　いざとなったら、父母のいない間に、物置をのぞきに行くことだってできたのに、ぼくは母の言葉に逆らえなかった。その代わり、小学校から戻ってくると、母にクロの様子を聞くことにした。

「クロは具合が悪いのよ」
どこがどう具合が悪いのか、母は説明しようとしない。やはり触れてはならないものがそこにあるのだった。
どうしても我慢できなくて、一度だけ物置の戸をこっそり開けたことがある。床の上にはクロらしい体が横たわっていた。ほとんど動かず、息をしているのかも分からなかった。見てはいけない物というのは、これだったのか。ぼくはのぞきに行ったこと自体を、さっきまで忘れていたのだ。
それから一週間もたたないうちに、母は小学校から戻ってきたぼくを座らせると、まじまじと見つめながら言った。
「クロが死んだの」

何と答えたらいいか分からなかった。あの時のクロは、生きていたとしても虫の息だったのだろう。ぼくが黙ったままなので、母は話を続けた。
「クロをね、リンゴの木箱に詰めたの。お花を入れて飾ってあげたわ。そして、焼いてもらうために引き取ってもらうことにしたの」
「どうなるの？」
「動物のお墓に一緒に入れられるのよ」
ぼくは見たいと言ったが、母は決して許してくれなかった。
次の日の朝に、クロは清掃局に引き取られていった。母の話はどこまで本当だったのか。死体処理を頼んだわけだから、墓地に入れられたかどうか。他の焼却灰とともに、埋められてしま

ったのかもしれない。ぼくの幼年時代はこうして終わった。

二

あの頃、昭和四十年代はまだ日本は豊かではなかったが、皆希望を抱いていた時代だった。町の中には子供があふれていた。子供のいる家庭、特に男の子がいるうちでは、よく犬を飼っていた。犬は走り回るから、男の子の散歩にはぴったりだった。

　西側の隣家(りんか)も、今ではネコ派になってしまったが、当時は犬を飼っていた。小柄な柴犬だった。ところが、転勤先では犬が飼えないというので、代わりに飼ってくれないかと母が頼まれた。若い頃、実家でも飼っていた母は、大の犬好きだったから、二つ返事で引き受けた。

ただ、一つ問題があった。名前だった。山田洋次の映画『男はつらいよ　寅次郎と殿様』の中で、とらやに迷い込んできた犬にトラという名前がついていて、寅次郎が怒って一悶着（ひともんちゃく）起こす場面がある。母がもらってきた犬はサブという名前だったが、叔母の夫の名前は三郎だった。

「だって、サブって名前がついてたんだから、しょうがないのよ」

　実家に遊びに行った母は言い訳していた。三姉妹の家に入り婿（むこ）した叔父は、寅次郎とは違って温和な人だった。犬の名前で機嫌を損ねるようなことはなかったので、笑い話のように話していた。

　クロがいなくなって、二年ほどたっていた。ぼくもようやく一人で犬の散歩ができるようになっていた。散歩をしていると、よく人に声をかけられたものだ。

「それ、キツネですか」

　黄金色の艶（つや）のある毛は、たしかにキツネの毛皮を連想させたが、顔も何だがキツネに似ていた。お稲荷（いなり）さんにお仕えしているあのキツネに。

　ただ、サブには一つ困った性癖（せいへき）があった。女の子が大好きということだった。えっ、それがどうして？　と言われそうだが、女の子のそばに行くと、クンクンにおいをかぎ始め、スカートの中に頭を突っ込んでしまうのだった。

　うっかりしていると、ぼくがサブにやらせていると思われか

ねない。またやらかしているのに気づくと、ぼくは力尽くでリードを引いて、サブを引き離さなければならなかった。

「恥をかかされた」

ぼくはご主人様気取りだった。クロの時は引きずり回されていたから、大人しいサブには尊大な態度を示してしまった。

サブには頭を突っ込む癖があると話したが、今度はスカートの中ではない。ブロック塀の穴に突っ込んだのだった。当時は敷地の境界には、ブロックを積んだ塀が立っていたものだ。ただ、風通しを良くするために、ところどころ穴が開いていた。

「サブが道の方に顔を出してるよ」

ぼくは仰天して母を呼びに行った。行きはよいよいだが、帰

りは耳が引っかかって抜けなくなったらしい。何とも無様な姿で首かせをはめられ、さらし物にされている感じだった。

どうにも困り果てた母は、父の勤め先に電話をかけた。そんなことで一々電話してくるなととがめられたが、塀の穴をハンマーで崩せばいいと教えてくれた。

ぼくはサブの首を傷つけないようにして、穴の縁を広げていった。おかげでサブは、前よりも頻繁に穴から顔を出すようになった。

ところで、南側の隣家は地所が広かった。大正生まれの五十代の、何でもはっきり言うおばさんが、ご主人と大学生くらいの息子たちと暮らしていた。おばさんはいつも頭にタオルや手

ぬぐいを巻いていた。

小学校から帰ってくると、おばさんはよく洗濯物の取り込みをしていた。大きな声で「ただいま」とぼくが言うと、それに負けないくらい大きな声で、江戸弁ぽく「おけえり」と言うのだった。

あるとき、おばさんが旅行のみやげだと言って、博多（はかた）人形を贈ってくれた。日本髪に結った、浮世絵（うきよえ）から抜け出してきたみたいな人形だった。母はおばさんが気前いいのに驚いていた。

「増築の工事するのに、挨拶（あいさつ）だって卵１パック持ってくるような人なのに」

そのうちでも犬を飼っていた。白くて毛の長い中型犬だった。ぼくと母がサブを近くの公園に、狂犬病の予防注射のために連

れていったときだ。接種が済んで帰ろうとすると、公園の手前でおばさんと会った。白い犬を連れていた。

「うちの犬、病気なのよ。治らないらしいから、保健所に引き取ってもらおうと思って」

それが何を意味するのか。連れてこられた白い犬は、保健所の檻に入れられる。他の野犬もしょげたような顔をしている。ふさぎ込んで震えている犬もいる。救いの手が差し伸べられるのは、生まれて間もない子犬だけである。数日後、窓のない部屋に押し込まれ、息苦しさに痙攣（けいれん）が始まり……

当時のぼくは殺処分の方法は知らなかったが、白い犬にどんな運命が待っているか、薄々感じながらも、想像することを禁じてしまったのだ。何でそんな話をするのかと言えば、ほどな

くしておばさんが入院したからである。
「犬を処分したからかしら」
思ったことを何でも言う点では、母の方も決してひけを取らなかった。それでも、入院先の病院に見舞いに行ったところを見ると、互いに一目（いちもく）置いていたようだが。
ある夜、強い地震があった。箪笥（たんす）に載せられていた博多人形は、床に落ちて粉々に砕けた。ぼくはいやな予感がした。しばらくして、前のうちに多くの人が出入りしていた。母は様子を見に行った。おばさんは癌（がん）で亡くなっていたのだ。
白い犬は何の病気だったのか。そのときはまだ知らなかった。
サブはどのぐらいうちにいたのだろう。二年もいなかったのではないか。サブの具合がおかしいので、母とぼくは獣医に連れていくことにした。
キツネみたいに、毛並みに艶のあるサブを見て、獣医は頭をなでながら「いい犬だ」と言った。そして、サブの病気について話した。
「これはフィラリアっていってね。蚊を媒介にして移る病気です」と言いながら、犬の心臓の標本を見せてくれた。そこには無数の白いミミズがからまっていた。成長した虫が血管に詰まってしまう病気だった。
「手術するって方法はあるけどね。助かるかどうかは……」
これは死の宣告だった。あの白い犬も同じ病（やまい）だったのだろう。最初は元気がなくなり、歩くのもつらそうで息が荒くなる。

薬で虫を殺すことはできるのだが、症状が進んだ段階では、心臓麻痺で即死する恐れがある。

　残され道は成り行きに任すというものだった。クロのように少しずつ弱っていき、物置に移されて、最期の時をひっそりと待つという形か。ぼくの記憶では、クロは具合が悪くなってから、かなり生きていたような気がする。精神力だけで生きていたのか。

　サブの方はどうだったろう。獣医から連れて帰るときは、息が弾む程度でそれほど苦しそうではなかった。この分ではサブもしばらく生きているんだろうと思った。

　ぼくは小学校の五年生で、夏休みに箱根の林間学校に出かけ

た。小涌園（こわきえん）のホテルに泊まったが、夜は枕投げの戦争ごっこになった。ゆっくり寝ているどころではない。しまいには、自分の寝る場所までなくなり、泣き出してしまった。次の日は、芦（あし）ノ湖（こ）の湖畔を歩かされたが、降りが激しくて、傘を差していてもズボンがぐっしょり濡れた。帰りの日になって、ようやく天候が回復し、貸し切りバスの後ろの席で、機嫌を取り戻していたのを覚えている。

　帰宅して数日後、サブが苦しそうにしていた。歩いて獣医の所に連れて行けそうにない。そこで、病院に電話すると、サブを車で迎えに来てくれた。

　病院の車の荷台にサブは乗せられた。サブは黙ったまま、じっとこちらを見ていた。ぼくには分からなかったが、サブは悟

っていたようだった。これが別れであるということを。
翌朝、獣医から電話があった。夜の間にサブが死んだという話だった。引き取りに来るかと獣医に聞かれ、母は病院で処分してくださいと答えた。ブロック塀の上に屋根をかぶせた犬小屋は、最後に連れ出したときのままだった。塀に開けられた穴から、サブが首を出すことはもうない。

三

しばらく犬のいない時期が続いた。母がイヌ派であることは述べたが、父はどうだったのか。父が猫を贔屓（ひいき）にしているとは、子供の頃の自分は知らなかった。
ある夜、父が野良猫の子を拾ってきた。そのとき、ぼくは眠っていた。可愛い顔しているので、うちで飼えないかと、母に交渉したらしい。母は強硬に反対した。ぼくが小児喘息（しょうにぜんそく）だったから、家の中で飼うわけにはいかない。土足でうちと外を行き来するのは許せない。
「第一、私、猫、大嫌い！　捨ててきてちょうだい」

父は泣く泣く捨てに行った。その夜は捨てた子猫との生活を空想し、眠れない時を過ごしたらしい。よほど悔いが残ったのだろう。女房が死んだら七匹ぐらい飼ってやろうと、書き残していた。後年、それを読んだ母は「そんなこと言ったって、自分の方が先に死んじゃったじゃないの」と言って笑った。

こう書くと血も涙もないみたいだが、母は思った瞬間に、何でも口にしてしまうタチなのだ。ぼくの反応はというと、子猫が捨てられたと聞いても、大して心も動かなかった。猫は夜中、ニャーニャーうるさいし、糞便は気が狂うほど臭いし。

ぼくが高校卒業を控えていた頃、三頭目の犬大五郎がやってきた。生まれたのは妹の友達のうち。とはいっても、平屋の集

合住宅、お隣さんとは壁を隔てただけの長屋で、小さな庭までついていた。

昭和時代には貸家でも、こんな贅沢（ぜいたく）ができたんだな。庭に花を植えたり、犬小屋を置いたりして。犬はほえるから近所迷惑だというが、昔はそんなうるさいこと言わなかった。父ちゃんが怒鳴って、卓袱台（ちゃぶだい）引っ繰り返して、茶碗が割れる音、子供が泣き出す声、そんなのが聞こえても、またやってるなくらいで、大して気にも留めなかった。

さて、生まれた子犬がうちにやって来た。玄関に入った途端、飼っていたインコが飛び出してきた。なわばりへの侵入者は何者だ！　とでも言うのだろう。茶色い子犬は柴犬にシェパードでも混じっているのか。耳は垂れているし、何だか片足を引き

ずっている。
　連れてこられてから数日は、夜通し鳴き続けていた。引き離された母親や兄弟のことを思っていたのだろう。数日すると、ダンボールの箱から飛び出して、部屋の中を動き回るようになった。
　そこで、大五郎のために犬小屋を用意することになった。父と僕が買ってきた木材で作り、壁は青い色に屋根は赤い色に塗った。衛生のために、屋根は取り外しができるようにした。寂しがらないように、妹の部屋の脇にある流しの所につないでおいた。窓を開けさえすれば、こちらの顔が見えるように。
　ミルク沸かしの小さい鍋に、魚のあらの煮付けと、食パンの

耳を浸（ひた）したものを合わせ、フィラニア予防の薬を混ぜて与えた。食べさせた後、鍋を畳の上に置きっぱなしにすると、インコが飛んできて、柄を嘴（くちばし）で押してぐるぐる回した。子犬が相手ではかなわないので、鍋に八つ当たりしていたのだろう。
　歩くたびに後ろ足を引きずっていた大五郎だが、十日ほど経つと普通に歩けるようになった。ただ、まだ歩くのは下手で、下り坂で走ると、急に止まれずに転がってしまう。
　母と僕、妹の三人が交替で散歩に連れていった。小学校前の大通りは、車の往来が少ない。そこで、妹は大五郎をリードから放して、自由に走り回らせていたらしい。生まれて一ヶ月に満たない子犬だから、通りの端から呼ぶと、喜んで駆けてくる。
　そのとき、車が走ってきた。大五郎は気づかずに向かってく

る。妹は叫んだのだが。急ブレーキ！　しかし、間に合わなかった。大五郎はタイヤにはじき飛ばされた。
ぐったりして動かない子犬を抱いて、妹はうちに帰ってきた。目を真っ赤に腫らして。
「大五郎が車に轢（ひ）かれちゃった！」
次の瞬間、うちの中にいても分かるほど、母の平手が妹の頬を鳴らした。
大五郎は小便を漏らしていた。すぐに目を覚ましたのでほっとした。けがはないか調べたが、擦り傷が見られる程度だった。軽かったので、ボールのようにはじき飛ばされ、落ちた先が草の生えた駐車場だったことで、事なきを得たのかもしれない。
心配になって、僕が子犬を抱き、母と妹も動物病院について

いくことになった。その頃はすでに、サブを診てくれた獣医は亡くなり、山を越えた向こうの町まで歩いて行かなければならなかった。
「目立った外傷もないし。脳震盪（のうしんとう）でも起こしたのでしょう」
何か問題が起こらなければ、もう来なくてもいいということだった。
大五郎は立派な犬に成長していった。垂れていた耳もぴんと立ち、引きずっていた足も、全力で走れるほどになっていた。一番の楽しみは「散歩」と「ご飯」だった。その言葉を聞くと、目を輝かせ、開いた口から大きな舌を覗かせて、はね回りながら鳴くのだった。

普段は鎖でつないでいたので、散歩の時ぐらいは自由に走らせてあげたかった。大五郎が全速力で走ると、十八歳の僕でさえ、息がはずむほどだった。コースは大体決まっていたから、すぐに僕の方が引っ張っていかれるようになった。

犬のしつけの基本は、犬に上下関係を教え込むことだという。散歩のときも勝手に走らせずに、人間の指示に従って歩かせるようにすべきだという。でも、そんなやり方は好かなかった。犬と一緒に走って汗をかくほど、犬との一体感が感じられるときはないからだ。

ただ、それは飼い主が一人の場合で、家族で飼っている場合には問題が多い。大五郎の勝手気ままに任せたため、いきなり走り出したり、急に立ち止まったりするようになった。

わがまま息子のような大五郎に、手を焼いたのは母だった。当時はまだ四十代だったが、運動をやっていたわけでもないし、腕に筋肉があったわけでもない。

「あんたが走るもんだから、私が散歩連れてくとき、大変なんだから」

母は必死に走るまいとするのだが、大五郎は逆らうように走り出す。急に立ち止まろうとするので、姿勢のバランスが崩れてしまう。

「あっ」

急に反対に走り出した大五郎に、母は足を滑らせ、そのまま路面に引きずり倒された。痛くてしばらく立ち上がれない。大五郎はようやく気づいて、母をいたわるように顔を近づけた。

休みの日には、普段と違う道を散歩に連れていった。大五郎は電柱に差しかかるたびに、小便をかけていく。出す小便がなくなって、ちびりちびりしか出なくなる。これはなわばりの主張であるとともに、自分のうちに帰るために、臭いの跡を残すことでもあるのだ。グリム童話のヘンゼルが、白い石を落としていったように。

昔の日本人は無頓着（むとんちゃく）で、通りに犬の糞を平気で放置していた。少しまともなら、シャベルを持って行き、道ばたに埋めていた。ただ、舗装された道ばかりでは、糞を埋めるところもないから、ビニール袋で持ち帰るようになった。一方、小便の方は犬の本能だから、やめさせるわけにもいかない。人間の方は

立ち小便することが、随分少なくなってはきたが。

あるとき、僕は肉屋の前を、大五郎を連れて散歩していた。壁には大きな鏡があり、そこに写った犬の姿を、大五郎は他の犬と思ったのだろう。リードを引っ張っても、くんくん鼻先を近づけて、相手の臭いをかぎ取ろうとする。

「変な野郎だ。何でこの犬、俺と同じ臭いしてるんだ」とでも言いたいんだろう。これが猫の場合だったら、鏡の中の自分に猫パンチを食らわせてるところだろう。

犬は散歩が大好きだが、リード付きでは自由に走れない。散歩のほかに、思うままに走り回らせることも、犬の精神衛生には必要なことだ。ドッグランが近くにあればいいのだが、ない

場合には自宅の庭で走らせることになる。
　今の地所に越してきたとき、父は庭一面に芝生を植えたが、幼児の僕が三輪車で走り回ったせいで、大半が枯れて地面が剝(む)き出しになった。クロやサブも庭で放したことはあるが、大五郎ほど庭で駆け回るのが好きな犬も珍しい。
　家の周りを一周できるので、うちの庭がドッグランとなった。大五郎は全速力で走り、急停止すると、向きを変えて逆方向に走り出す。
「わあ、すごい、すごい」
　僕がおだてると、大五郎はほめられたと思い、全速力で走行、急停止を繰り返すのだった。犬の運動とストレス解消にはなったわけだが、地面がどうなったかは分かるだろう。わずかに残

っていた芝生も消えた。
　そればかりでない。真夏は犬にとってつらい季節なので、穴を掘ってひんやりした土にお腹をつける。汗をかかない犬にとって、口でハアハアやるよりは、よっぽど効率的な体温調節法なのだ。
　庭の中を駆け回るのを覚えると、庭から脱走したいと思うものだ。猫の場合なら、助走もせずに、垂直に一メートル以上ジャンプできる。それだけ身軽で、後ろ足には頑強な筋肉がついている。
　犬の場合は体が大きいから、瞬発力では猫に劣る。ブロック塀や柵があれば、一応逃走は防げるというわけだ。ただし、塀

に向かって直線に走れる場合には、助走をつけて塀を駆け上がり、乗り越えて道路に出てしまう。

　大五郎はすぐに習得してしまった。庭に放すときはいつも見張っていて、万一出てしまったときは、肉の塊で釣っておびき寄せる。犬は道路しか移動しないし、呼べば寄ってくるから、捕まえることは難しくない。そこが猫と大いに異なる点だ。

　庭の中を走り回っているときでも、捕まえられてつながれるのは、犬にとっては苦痛だろう。それを察すると、庭の中を必死で逃げ回る。その場合にも、肉の塊を見せるのは有効である。

　僕はすぐには与えず、大五郎の鼻先でひょいと肉を持ち上げる。すると、人の頭上辺りまでジャンプして、塊を取ろうとするが、そうはさせまいと持ち上げるから、大五郎はサーカスの

曲芸みたいに、しばらくぴょんぴょん跳ね続ける。疲れたところで塊を与え、食べているうちに、首輪をつかんでつないでしまう。

　大五郎はどんな性格の犬だったんだろう。愛嬌（あいきょう）があって、頭をなでられると、目を輝かせ、口からあふれ出る舌を出して、愛情の表現で顔や腕をなめてくる。その一方で、雨の日が続いて散歩できなければ、不機嫌な顔してふさいでいる。

　散歩に行くときと、餌をもらうときには、とにかく大声で鳴く。向こう三軒両隣どころか、向かいの丘にはねかえって、こだまするほどの声で鳴く。素直な性格だから、我慢するということも知らない。

僕が一番印象に残っているのは、大五郎が臆病であるということだ。特に、遠くから聞こえる音楽や、とりわけ、救急車のサイレンに反応した。サイレンに合わせて、ウーウーと短調の声で鳴き続ける。人の命が途絶えかねないときに、葬送曲みたいな絶唱を聞かされると、飼い主のこちらまで滅入ってしまう。

真夏は暑くても、窓を開ければ風が入ってくる。家が建て込んでいなかったから、エアコンを使わないときの方が多かった。サッシを開けっ放しにすると、いろいろな物がうちに入ってくる。蚊は御免こうむりたいが、鳩なら話は別だった。畳の上をついばむさまが滑稽だったからだ。僕は面白がっていたが、母はすぐさま目の色を変えた。土足で畳に上がるのが許せない

らしい。父が拾ってきた子猫を、捨てさせに行かせたのも、畳が汚れるだけではなく、動物の分際（ぶんざい）で座敷に上がるのは「以て（もって）の外（ほか）」という意識があったからだろう。

大五郎を庭に放しているとき、たまたま開けっ放しにしていると、座敷に飛び込んできて、くんくんいろいろな物の匂いをかいでいる。この場合も、僕は面白がったわけだが、母の剣幕に追い出さざるを得なかった。ただ、追いかけても、部屋の中を逃げ回るばかり。そんなときは、掃除機のスイッチを入れ、大五郎に向けて近づけると、ワンワンほえながら、すぐに庭に下りてくれるのだった。

台風が襲来した夜、高台にある家には暴風雨がたたきつけ、

古い木造の平屋は縁の下から吹き込む風で、時折がたんと動くほどだった。大五郎の恐怖は極限に達していた。目が覚めた僕と妹は、雨戸に吹きつける音ではなく、ガリガリいう音に顔を見合わせた。

どうやらうちの中に入れてほしくて、鎖につながれたまま流し台に立ち、木の雨戸をかじっていたらしい。すでに小さな穴が開いていた。サッシを開けて「やめろ」と声をかけても、言葉が通じるわけがない。こちらの声を聞きつけて、ますますかじる勢いは増していく。

ついに、雨戸から大五郎が顔を出した。「こんばんは」と言ってるはずもないが、台風の雨風でびしょ濡れになった犬を、真夜中にうちに入れてやる発想が、当時の家族にはなかったよ

うだ。番犬は外で飼うものという固定観念があったからで、ふたたびサッシを閉めて、そのまま寝てしまった。

翌朝、台風一過で晴れ上がっていたが、吹き返しで、まだ風は強かった。僕は昨夜の騒動を見過ごすことができず、大五郎に向かって怒りを抑えられなかった。大きく開いた雨戸の穴を指さしながら。

「何だよ、これは何だよ」

しかし、大五郎はしかられている意味が分からない。どうして夜中助けてくれなかったのか。そればかりか、せっかく開けた穴のことで、怒り出すなんてひどい！

おびえたように背を向けて、小屋の中に頭を突っ込んでいる。

僕は勢いに乗って、大五郎をしかり続けた。
「これは何だよ！」
　次の瞬間、大五郎は振り向きざま、僕の手を噛(か)んだ。痛みとともに血が噴き出した。怒りが頂点に達した僕は、サンダルを拾い上げると、大五郎の頭を思い切りたたいた。それから一週間、散歩にも連れていかなかった。
　とにかく、大五郎が臆病だったことは、お分かりいただけたと思う。臆病な犬ほどよくほえると言うが、大五郎の場合は、声の大きさが並外れていた。ドスがきいた応援団長が、絶叫しているみたいだった。鳴き出すとしばらく止まらない。周囲の丘に響いて山彦(やまびこ)となり、自分の声とともにワンワン輪唱してるみたいだった。

　恐らく、迷惑に感じている人が多かったろう。二十世紀の頃だったから、世の中は今ほどピリピリしていなかったが。ただ、団地に住むおばあさんから感謝されたことがある。
「お宅のワンちゃんが鳴くと、息子が帰ってきたのが分かるんですよ」
　その頃はうちの横はまだ畑で、一郭(いっかく)が駐車場になっていた。そこに輸送トラックがバックする音を立てて入っていくから、大五郎がひときわ大声で鳴きまくり、本人より先に帰宅を知らせたというわけだ。
　うちの南側には、「おけえり（お帰り）」と江戸弁で挨拶するおばさんが住んでいたことは、以前書いたとおりである。す

でに代替わりして、息子夫婦の代になっていた。そのうちでは白いサモエド犬を飼っていたのだが、飽きられてしまったのか、野良犬みたいに道を歩き回るようになった。

大学の行き帰りに見かけるので、「かわいそうに。捨てられてしまったのか」と母と話していたものである。その犬がたまたま開いていたうちの門から入り込んだことがあった。犬同士はほえたり、噛みつき合ったりで、大喧嘩（おおげんか）が始まるものだ。大五郎の方は鎖につながれていたから断然不利である。

ところが、窓の外を眺めていたら、サモエド犬がそそくさと近づき、何と大五郎と合体してしまった。平安時代の通い婚じゃあるまいし、しかも、大五郎はオスで立派な代物の持ち主だった。ここでようやく、サモエド犬の性別が判別した。

「大五郎は幸せだったのね」

妹が笑っている。たしかに、気持ちよかったのかもしれない。ただ、大五郎がまき散らした子種がどうなったかは不明である。サモエド犬が母親になった姿も見ていない。

では、大五郎は喧嘩したことがないか、というとそうではない。負けん気が強い方だから、サイレンにはしっぽを巻いても、本物の犬に脅（おび）えることはなかった。まあ、ライオンみたいな顔したチベット犬でも出て来たら、逃げ出したかもしれないが。

ある日、母が大五郎を散歩に連れだし、やたらに鳴くスピッツのいる家の前まで来た。そいつはジャンプして、ブロック塀の上から顔を覗かせていたものだ。大五郎が挑発してうなると、

何とブロック塀を乗り越えてしまった。でも、鎖につながっていたので……
　スピッツは首つりになってしまった。あわてて母は呼び鈴を鳴らし、事なきを得たのだが。その出来事を母は「大五郎の武勇伝」として、得意げに語って聞かせた。取っ組み合いすらしていないのだから、武勇伝どころか、戦ったことにもならないだろうに。
　人間は年をとるにつれて、時間の進むスピードが速まる。今まで生きてきた時間と比べるので、子供時代の一年と成人してからの一年では、進み方がまるで違うのである。ましてや、犬が生きられる時間は、人間の五分の一くらいだから、十年過ぎ

れば初老に至り、若かった頃の元気よさは、たちまち影を潜めてしまう。
　大五郎が十三歳になったとき、古くなった自宅を壊して建て替えることになった。改築を頑(かたく)なに拒んでいた父が、人工透析をしなければならなくなり、余命が長くないことを悟ったのか、元気なうちに新築した家に住みたいと思うようになったからだった。
　そのためには、地所を更地にしなければならない。子供の頃からの思い出の詰まった家ばかりでなく、美しい花を咲かせてくれた桃や椿(つばき)、甘いほのかな香りを楽しませてくれたキンモクセイ、赤ん坊の味がするという実がなるザクロまで、庭木のほとんどが伐採(ばっさい)されてしまうことになった。これは思っていた

以上に心痛むことだった。

　ついに、家を取り壊す日が訪れた。玄関のガラスが割られ、土足で職人が家に入ってきた。チェーンソーが庭木を、片っ端から切り倒し始めた。大五郎はとりあえず、仮の住まいとなったアパート前に連れていった。

　元の家に戻ってみると、僕の部屋はブルドーザーで壊され、家の三分の一は崩れ去っていた。夕方、仕事先から帰ると、大水害に遭ったかのように、家は瓦礫（がれき）の山と化していた。アパート前に移動した犬小屋の中で、大五郎は不安そうにしていた。

　普段はおとなしいのだが、環境の変化についていけなかったのだろう。挙動不審になったので、アパートの隣人には、くれ

ぐれも手を出さないでほしいと言っておいた。ただ、頭をなでるとしっぽを振っているので、つい気を許した隣人が手を伸ばし、歯を当てられてしまった。そこで、更地になった地所に犬小屋を戻し、大五郎だけ殺風景な庭に置いておくことになった。

　更地になってからは、工事の方は遅々として進まなかった。その間、僕と両親と妹の四人家族は、二部屋のアパート暮らしを続け、大五郎は殺風景な庭の端に置かれた犬小屋で、寂しい夜を送っていた。

　コンクリートの土台ができたところで、ある朝、巨大なクレーンが現れて、鉄骨の柱を組み始めた。見知らぬ男たちが大挙して来ただけでも、大五郎にとってはストレスだったろうに、

クレーンが鉄骨を吊り下げているさまを見た日には、もうこの世の終わりとでも思ったのだろう。

つながれていた鎖を断ち切って逃げ出した。正気を失った大五郎は、チワワを連れたおばあさんに襲いかかった。噛み殺されないように、おばあさんがしゃがみ込んで、チワワを腕の中で守っていると、群衆が集まってきた。

「おい、この野良犬め。保健所に電話しろ！」

たまたま、散歩していた父が通りかかった。父は杖をついていたのだが、チワワがつながれていたリードを借りて、大五郎の首輪につなぎ、それを杖に巻きつけた。大五郎をアパートに連れていくと、母が現場に駆けつけ、人々の怒号の中で、リードを返して平謝りした。おばあさんの家には、後日、改めてお詫びにうかがうことになった。

その日の夕方、騒ぎを母から聞いた妹が、不安そうに僕に尋ねた。

「大五郎は保健所に連れていかれて、殺されてしまうの？」

結局、大五郎はお咎めもなく、晩年を過ごすことができた。ほどなく新居が完成し、家族が引っ越したのは、その年の暮れのことだった。以前の場所につなげなくなり、大五郎の犬小屋は北東側に移された。いわゆる鬼門の方角なのだが、大五郎に家の守護をしてもらおうと思ったわけではない。

新居ができて大喜びのはずなのに、カナダや北海道へ引っ越しを繰り返していた妹が、「やはり私はここで暮らせない」と

言い出し、北海道に旅立ったのは、新居ができて一ヶ月後のことだった。妹を溺愛（できあい）していた父は、内心落胆したであろうに、妹のわがままを許した。

　さて、大五郎にはそんなことは理解できないと思っていた。犬には言葉が通じるのだろうか。「お散歩」と「ご飯」は分かったようだが、パブロフの犬の実験でも明らかなように、これは条件反射に過ぎない。なぜなら、犬には言語能力がないからだ。

　鳴き声で仲間同士コミュニケーションしているといっても、意味を持つ最小の単位である形態素と、それを分解した意味を持たない音素の組み合わせで、無限の表現を可能とする「二重分節性」がなければ、言語とはいえないのである。

　その代わり、犬には人間の一億倍の嗅覚（きゅうかく）があるという。聴覚も十倍近くは鋭いというから、人間が感じ取れないわずかな兆候も聞き取るのだろう。それが人間には直感として映るのではないか。言葉を持たない動物ならではの能力である。また、動物には魂がないなんていうのも誤りで、言葉は話せなくても、動物には人間に劣らぬ感情があるのは、犬や猫を飼ったことがあれば自明のことである。

　言語能力を発達させた人間は、論理的分析を経ない理解を退化させてしまった。人間が社会生活を送る中で、直感はさらに抑圧されるようになった。身分社会では、権力者の権威を突き崩しかねない存在だからである。

　妹が北海道に引っ越す日、でかいカバンを引きずって玄関を

出て、「大五郎、行ってくるね」と言ったとき、大五郎の直感は愛情から失望と怒りに変わっていった。普段は出したことのない、怒りに悲痛さの混じった声でうなった。「僕のことを見捨てる気か！」と叫んでいるように聞こえた。

父の人工透析が始まると、妹も北海道から戻ってきた。親孝行がしたくなったのだろう。父を車に乗せて小旅行するようになった。ただ、平穏な時期は長くは続かなかった。父が一年余りの入院生活の末、敗血症で亡くなったのは、家を新築して二年ほど経ってからだった。

葬儀が行われ、家から父の棺が担ぎ出された。門を出るとき、犬小屋にいる大五郎に向かって語りかけた。

「父ちゃんが行っちゃうよ」

大五郎に通じたかどうか。父は数回の外泊を除けば、ここ一年ほとんど家にいなかったのだから、すでに過去の人になっていたのかもしれない。

当の大五郎も老いていた。十五歳を過ぎてからは、以前のように駆け回ることもなくなった。真夏の暑さには弱かったから、犬小屋の前にブルーシートをかけて、日陰で休めるようにした。

あれだけ好きだった散歩だが、坂道を上るのがきついらしく、もう帰ろうと言わんばかりに、坂を下るところでUターンしてしまう。その頃から心臓が弱ってきて、激しい息遣いをして、苦しげにうずくまることが多くなった。

大五郎の病状は悪化していった。心臓の発作が余りに苦しそうなので、獣医に往診してもらった。注射を打つと症状は治まったが、いつ再発するか分からず、医師が到着するまでは、飲み薬を投与するように指示された。

しかし、餌の中に混ぜただけでは、錠剤だけ残してしまう。包丁で潰して肉の缶詰に混ぜるしかなかった。老化も進んでいき、眼球が白濁してきた。人間の白内障と同じで、目もほとんど見えなくなった。脳血栓の症状も出てきて、まっすぐ歩かせようとしても、同じ方向に回転してしまう。

そこで、玄関を柵で仕切って、その中に大五郎を入れておくことにした。それでも、便意を催すと、大きな声で鳴いた。犬は嗅覚が人間の一億倍もあるため、自分が眠るところでは、糞便はしたがらないのである。

真夜中でも鳴くと、大五郎を抱き上げて通りに連れていった。小便をする間も、体を支えてあげなければ倒れてしまう。老犬介護は数ヶ月続いたように思う。

ついに、大五郎は餌を食べられなくなった。食べようとしても、飲み込めないのである。最期の時が近づいてきた。三日後、ちょうど獣医が休みの日に、大五郎は激しい心臓発作に襲われた。薬を飲まそうとしても吐き出してしまう。どうすることもできなかった。苦しみは夜通し続いた。

翌朝、大五郎はコンクリートの上に横たわっていた。眠っているものと信じたかった。用事があって、ちょっと外出して戻

ってきた。僕は元気がいい頃の、立ち上がった大五郎を想像したが、現実に目にしたのは、布がかけられた姿だった。仏壇から香炉を借りてきて、線香をあげた。

子犬の姿でうちに来てから、十八年半。人間の赤ん坊が高校を卒業するほどの時間が、その間に流れていた。高校生だった僕も、三十半ばを過ぎていた。青春とともに、大五郎も去っていったのだった。

プレーリードッグのキョロ

犬の大五郎が死んでから、うちでは動物を飼っていなかった。今度は部屋の中で飼いたいと妹が言い出し、ペットショップに出かけていった。数匹の中で一番人なつこいプレーリードッグを買ってきた。

プレーリードッグというのは、草原に住む犬という意味だが、実はリスの仲間の齧歯類（げっしるい）に属する。地下にトンネルを掘って住み、天敵の猛禽が見えないか、後ろ足で立って見張りをする。安全と分かれば、周辺の牧草を食べに出かける。声が子犬に似ており、甲高い声でキャンキャン鳴くところから名づけられた。

実は、プレーリードッグはペスト感染の危険があるとして、

現在では輸入が禁止されている。妹が買ってきたメスのプレーリードッグは、結果的には病気を持ていなかった。ケージの中に放すと、最初はパニックになって逃げ惑ったが、すぐに落ち着きを取り戻した。

当初、僕はプレーリードッグが、どんな動物であるかよく知らなかった。体格は大きなネズミほどで、毛並みは焦げ茶色、前歯が発達していて、牧草などをよく噛み切る。後ろ足で立ちながら、前足の指で握って食べるところは器用である。ケージの中には、クッションと餌を兼ねた干し草が敷かれ、固形のペレットや、ひまわりの種なども食べていた。

妹はプレーリードッグに、キョロという名前をつけた。森永

のチョコレート菓子に、キョロちゃんというマスコットがある。アーモンドの胴体をした鳥のイメージだが、愛嬌があるところはちょっと似ている。プレーリードッグがキョロキョロしているから、キョロと名づけたのかもしれない。

妹はキョロを台所に放して遊ばせていたが、見ていないとあたり構わずかじるので、ふだんはケージに入れていた。運動不足にならないように、回し車が中に置かれた。慣れるとよくくるくる回っていた。

「何だ、プレーリードッグとか言っても、ネズミみたいなものじゃないか」

「キョロ、キョロ」と言って可愛がる妹がいないところでは、僕はプレーリードッグのことを「キョロネズミ」と呼んでいた。

そうした気持ちが、キョロに伝わっていたのかどうかは分からない。とにかく、僕はプレーリードッグとかいう、リスかネズミか、ビーバーかも分からない動物に、当初は親しみを持てなかったのだ。

その気分を助長させたのが、プレーリードッグの噛み癖だった。牧草を噛み切るのに長(た)けた歯は、ネズミと同じく尖っており、すり減らないように、次々に生えてくる。興奮すると、キョロはぴょんぴょんジャンプを始める。これは危険な兆候だった。それまでに迂闊(うかつ)に手を出して、血が出るほど噛まれたことがあったからだ。

手を出さなければ大丈夫だろう。そう油断した瞬間、キョロは僕の足に噛みついた。びっくりして足を揺すったが、振り落

とされまいと、ますます強く噛んでくる。どうしたらいいか分からなくなり、僕は反動をつけて、キョロを足から振り落とした。

キョロは飛んでいき、壁にぶつかると脳震盪(のうしんとう)を起こしたのか、お星様のようにくるくる回り出した。そのままお星様になってしまったらどうしよう？

しかし、すぐに正常に戻ったから、僕はほっと息をついた。

妹が帰ってきたので、面白半分に一部始終を話した。すると、妹は目をむきだして、僕の方を睨んだ。

「キョロちゃんがもし死んだら、お兄ちゃんのこと、一生恨む」

キョロはいたずら好きだった。かじれる物だったら、壁でも

ソファーでもかじってしまう。そこで、柵を作ってソファーには近づけないようにしたが、隙（すき）を見てよじ登って越えてしまう。

二本足で立てるので、前足が手のように器用である。握って干し草を食べるところは、幼児みたいに可愛いのだが、戸棚の戸に前足をかけて、開けて中に入ってしまう。母と僕はキョロを「泥棒さん」と呼んで、下半身をつかんで引き出したものだ。

洗濯物は恰好（かっこう）のおもちゃだった。うっかり柵をし忘れると、取り込んだばかりの山に潜り込む。持ち運べるものなら、何でもケージの中に運んでいく。おもちゃと言ったけれども、キョロはメスだから、巣作りの材料を集めているつもりだったのだろう。オスがいなければ、子供ができるはずもないのに。

あるとき、キョロが女物のパンティーを、ケージの中に運ん

でいった。まさかはこうとしたわけでもなかろうが、端をつかんで胸の前で揺すっている。それを見て僕は大笑いした。

「キョロがパンツ踊りをしているぞ」

実は、キョロについては、元気な頃の思い出ばかりで、それ以外の記憶がないのだ。妹が別居する際に、キョロもアパートに連れていってしまったからだ。たまに妹の所を訪れたときも、後ろ足で立って、前足で草を食べている姿しか覚えていない。

数年後、妹がキョロをうちに連れてきたとき、びっくりして声を上げてしまった。

「キョロが小さくなってしまったぞ！」

元気のいいときは、大きなリスぐらいはあった体が、ネズミ

ほどの大きさに戻ってしまっていた。餌を食べる量が減っていたのだろう。妹の可愛がりようが、子供に対するみたいだったので、もしキョロに何かあったら、妹の方がおかしくなってしまうのではないかと心配したくらいだった。

　僕の声を聞いて、妹の表情が暗くなった。キョロを抱き上げて、どこか悪くないか問いかけていた。言葉など通じるはずもないのに。すぐに獣医のもとに連れていった。

「癌ができているっていうの。でも、こんな小さい動物だから、手術はできないって」

　戻ってきた妹は、悲痛な叫びを上げた。それを聞いて思い浮かべたのは、何でも部屋中の物をかじっていたことである。アスペクトの壁の角もぼろぼろにしてしまったのが、原因だった

のかもしれない。

「だから、治しようがないのよ」

「自然にまかせろってことか」

　妹はキョロを連れて、アパートに戻っていった。次第に食が細くなっていき、キョロは衰弱していった。毎日のように、妹は獣医のもとに連れていった。点滴をやってもらったりもした。僕が心配していたのは、妹の精神状態だった。

「キョロちゃん、死んじゃったらしいわよ」

　母から聞いた翌日、キョロは籠の中で、花に囲まれて横たわっていた。器用に前足でつかんで、草を食べる愛らしい姿も、目まぐるしく走り回ることも、キーと叫び声をあげることもないのだ。

僕は妹の運転する車で、キョロを動物供養（くよう）する寺に連れていった。運転席の脇で、膝の上に籠を載せながら。寺に到着すると、カセットテープで経文（きょうもん）を上げてもらい、キョロの体は茶毘（だび）に付された。その間、妹は待合室で体を震わせていた。思い出を語るたびに、泣き声を上げていた。人は涙を流すことで、少しずつ癒されていくのだ。

フクシマから来たウサギ

黒いウサギは九年近く前、福島県浜通りにあった、さまざまな動物を多頭飼いして、子供たちと触れ合わせる施設で生まれた。野原を駆け回っていた母と娘に、ある日激しい揺れが襲いかかった。ついで、目に見えない放射能が降りかかったが、ウサギはそんなことには気づかなかった。

ただ大きく変わったことといえば、来園する子供たちが姿を消し、施設が閉鎖されたということだった。職員の多くは解雇され、身の回りの世話をしてくれた若者も去って、ウサギは糞便のあふれる家畜小屋に閉じ込められた。時折投げ込まれる野菜で命をつないでいたが、母と子の一部は死に、残りの兄弟は

もらわれていった。ボランティアに助けられた黒いウサギは、事情を知った女性に引き取られた。

ウサギは女性に可愛がられ、見違えるような生活を送った。野原を駆け巡ることこそなかったが、女性の部屋の中で跳び回り、朝夕には新鮮な野菜と果物を与えられ、清潔な籠と部屋の間を出たり入ったりした。

好物は食事ごとに与えられる桃と干しぶどうだった。人参、大根、青菜、香菜など、野菜の種類も多かった。女性の冷蔵庫の三分の一は、ウサギの食べ物で常時占められていた。

女性は黒いウサギを、我が子のように可愛がった。ウサギの方でも、女性に抱かれている間は、フクシマで死んだ母や兄弟

たちが、そばにいてくれているような気がした。太陽の日射しを浴びられないことが、唯一の不満だったが、それさえも絨毯（じゅうたん）の上で、女性と遊んでいる間は忘れた。

幸せな日々は五年ほど続いた。その頃からウサギは、元気を失いはじめた。食欲が衰えて体重も減ってきた。子供の頃に浴びた放射能の影響かどうかは、ウサギはもちろん、女性自身も考えたことがなかったが。

獣医に診察してもらうと、どうやら卵巣癌にかかっているらしいことが分かった。生殖機能は失われてしまうが、命を助けるには他に方法がない。伴侶がいないのだから、もとより子孫は作れない。手術が行われて、ウサギは一命を取り留めること

ができた。
　こうして黒いウサギは、ウサギ並みの寿命を生きられることになった。ただ、老いというものが迫ってきた。以前の美しい毛並みも艶が失われ、歯が曲がって生えてきたことで、大きなままの野菜や果物が食べられなくなった。女性がそれに合わせて、小さく切ってくれたから、食べる上で不自由することはなかったが。
　それからまた二年ほど過ぎた。ウサギにとっては、日の長さが変わることと、暑くなったり寒くなったりすることが　時間をとらえる手がかりだったが、女性の部屋の明かりやエアコンの空気調節により、いつも快適な時を過ごせることで、時間の

感覚を失っていた。
　ただ、遺伝子に組み込まれた命の時計は、確実に終末に向かって進んでいた。ウサギは寒くもないのに、クシャミを繰り返した。人間もクシャミぐらいはするもので、鼻風邪みたいにすぐに治るんじゃないか？　獣医に診せると、スナッフルという病気だと言われた。処方された薬を飲ませると、すぐにクシャミは止まった。そこで薬をやめてしまった。
　ところか、潜伏した菌は耐性化していった。しかも、放射能の影響がふたたび現れ、免疫力は低下していたから、止まらなくなったクシャミは、黒いウサギの鼻孔をふさぎ、鼻をかむこともできないから、鼻水が気管支に流れ込んだ。ぜいぜいする音が聞こえ、苦しくて口を開けてあえいだ。それはちょうど、

人間における喘息の発作に似ていた。

　薬は効かなくなっていた。黒いウサギは動けなくなり、ほとんど餌を食べなくなった。それが衰弱に拍車をかけた。あえぐウサギを抱きながら、女性は涙を流した。

「もう頑張らなくていいから」

　苦しむ我が子を見ていられない叫びだった。ところで、女性には喘息を病む兄がいた。いくら苦しくても、物を食べることはできたから、注射器を使ってすり下ろしたリンゴを、ウサギに呑ましてみるように言った。

「こんなに苦しんでいるのに？」

　絶句した女性は、半信半疑ながらも、ウサギの口にリンゴの

汁を流し込んだ。その途端、ウサギのおなかがグウとなった。腹が空いていたから、薬が効かなくなっていたのかもしれない。

　それから、ウサギの病状は回復に向かい、苦しげなあえぎも聞こえなくなり、自分で香菜を食べるほどになった。以前見られたように、口許を活発に動かして、葉を頬張るさまを、女性は喜んでビデオに収めた。

　翌日の夕方、命の時計が鐘を鳴らした。にわかに病状が悪化し、口を開いてあえいでいる。あいにくその日は休診日で、ウサギを獣医のもとにつれて行くことはできなかった。ウサギは大きく目を見開いた。残された時間が数分であるのをようやく悟った。女性が部屋を出るのを見届けると、大きく息を吸い、ゆっくり目を閉じた。

岩合光昭の「ねこづくし」

猫を飼うまでは、猫がこんな面白い動物だとは思わなかった。世の中にはイヌ派とネコ派がいるというが、猫を飼ってからは宗旨替え(しゅうしがえ)してしまった。犬は人間に忠実で、いつも飼い主の方ばかり気にしている。それがナルシシストの人間にはたまらないらしいが、犬の行動は結構シンプルである。

それに対して、猫は人間と親密になったり、距離を取ったり、その時々での接し方に振れ幅がある。飼い犬の多くが、かつては鎖につながれて、外の犬小屋で過ごしていた。今では屋内で飼う場合が多くなったが。犬は飼い主以外には、滅多に心を許さない。

それに対して、猫は江戸時代から人家を出入りしてきた。猫はネズミを駆除するために、放し飼いが奨励されていたのだ。猫にはまだ野生が残っているし、飼い主でない相手であっても、食べ物をもらうために、媚(こび)を売ったりする。猫同士で集まったり、てんでバラバラで過ごしたり。

そうした猫の魅力を、写真に撮り続けているのが、動物写真家の岩合光昭(いわごうみつあき)氏である。ＮＨＫＢＳプレミアムで「岩合光昭の世界ネコ歩き」が放送され、今では猫写真家という印象が強い。番組では猫の生態が動画で配信され、岩合氏の猫への思いと、猫を撮影する際の苦労話が語られる。猫の生態を知るには、動画の方が良いようだが、猫らしい一瞬の仕草を、多くの人は見

落としてしまう。一匹一匹の個性、猫の思いを一瞬でとらえるには、写真の方が優れているのである。

二〇一九年の春から夏にかけて、川崎市中原区の市民ミュージアムで、「ねこづくし　岩合光昭写真展」が開催されていた。写真展は島の猫、日本各地の猫、やきもの里の猫のコーナーで構成されている。その中で最も魅力があるのは、やはり島の猫である。島は都会と違って、猫に危害を加える人間が少ない。野良猫を捕獲して駆除することもなく、猫が生存していくことが、風景の一つとして認められているというわけだ。

猫の天敵は車と犬である。車が往来し、犬が散歩していると、猫は道の真ん中を歩けない。都会では最近、地域住民が共同でえさやりをする地域猫の存在が認知されつつある。ただし、保

健所に駆除される猫を増やさないように、避妊することが求められ、その印として耳の一部が切除されている。

島の猫は自然に任されている。繁殖や子育てても、妨害されることはない。海辺でのんびり過ごし、木に登って小鳥や虫をつかまえる。人が通ると顔色を見て、餌をねだり、漁で捕ったばかりの魚をもらう。

猫は人のそばに腰を下ろし、人の様子を観察している。好きな相手だと、甘えたような声で鳴く。鳴いても相手にされないと、体をすりつけてアピールする。えさがもらえたら、好きなところに行ってしまう。身勝手なように見えるが、猫は猫自身の欲求で動いている。だから、見ていて面白いのだ。

岩合氏は野良猫という言葉を好まない。野良なんて言うと、人間でたとえるなら、ホームレスみたいだからだろう。岩合氏は自由猫という言葉を用いている。猫にとって理想的な暮らしは、天気のいい日は屋外で過ごし、えさや水はもらって、雨の日や夜は、家の中で過ごすというものだ。野生を残しながら、人と共生するには、それが一番いい。

猫は人の様子を観察することで、身を守っている、えさをくれると見れば、すぐに心の一部を開いてくれる。カメラを構える人の気持ちまで、察してくれることがある。岩合氏の写真で笑ってしまったのは、沖縄で撮影された一枚。家の守り神シーサー（獅子）は、コミカルな表情で、大きな舌を口から覗かせている。並んでいた猫は、シーサーの横で、シーサーと同じポーズを取り、口から舌を覗かせている。

映画『ボブという名の猫』

売れないミュージシャン、ジェームズ・ボーエンが、ヘロイン中毒に苦しみながら、動物好きの隣人ベティ、ソーシャルワーカーのヴァル、野良猫だったボブの愛情によって、中毒を克服し、更生していく物語。

薬物中毒に陥る原因としては、家庭の不和が多い。また、中毒に陥る人間の職業では、ミュージシャンが多い。ジャズのサックス奏者、アート・ペッパーの場合もそうで、両親の離婚による愛情の欠乏があった。ミュージシャンが陥りやすい理由としては、音楽が麻薬に似ている点が挙げられる。感覚への刺激によって、人を至福の状態に導くからで、ミュージシャンの場

合、演奏の不調が続くと、至福の感覚を麻薬に求めてしまいかねない。麻薬の中でもヘロインは特に危険で、過剰摂取で命を落としたり、禁断症状が訪れると、七転八倒の苦痛が待っている。

この映画の舞台であるイギリスでは、薬物中毒者は犯罪者というよりは、病人という扱いを受けており、更生のためのアフターケアーが充実している。メタドンという代替の鎮痛薬が与えられ、ヘロイン中毒から抜け出せるように治療する。ただし、メタドンも麻薬の一種であるため、健康な体に戻るためには、メタドンの禁断症状も克服しなければならない。要するに、蟻地獄から抜け出すほどの試練が待ち受けている。

ジェームズ・ボーエンが更生できたのも、とりわけ、ペディ

とボブの愛情によるところが大きい。薬物中毒の根底には渇愛（かつあい）があるからだ。映画に登場するボブは、茶トラの猫で、「意志の強い猫」として表現されている。野性が残っている一方で、飼い主に対する深い愛情を示す。添い寝してくれるのも、茶トラの猫である。『ボブという名の猫』はノンフィクションを映画化したもので、出演した茶トラの猫は、作者自身を更生させたボブ自身である。

アニメ『ルドルフとイッパイアッテナ』

外の世界をちょっと見るだけのつもりが、そのまま行方知れずになってしまう猫は多い。黒い子猫ルドルフも、軽い気持で飼い主のリエちゃんの後について出たのだが、魚屋に追いかけられて逃げ込んだトラックで、東京の江戸川区まで運ばれてしまう。

そこで、野良の虎猫イッパイアッテナの世話になり、生きるための知恵をつけていく。イッパイアッテナというのは、野良猫として生きるために、いろいろな所でえさをもらい、場所によって呼ばれる名前が違うからである。

ルドルフはイッパイアッテナに、人間の文字を教えてもらう。

それによって、自分の能力が伸びていくのを感じる。やがて、ルドルフは習った文字を頼りに、ヒッチハイクでリエちゃんの待つ岐阜に戻る。これはちょっと無理な設定である気もするが、観客の小学生に、学習することの喜びを伝える効果がある。

　岐阜に戻ったルドルフだが、リエちゃんのうちには、自分と同じ名前の子猫がいた。それを知ったルドルフが、家を出て行く場面は悲しい。飼い主の女の子にとって、猫は生きた縫いぐるみに過ぎなかったからである。

　猫が飼い主のことをすぐ忘れてしまうというのは、誤解なのだろう。野良になった猫は、えさをもらうために、媚を売らなければならない。だからといって、飼い主を忘れてしまうわけではないのだ。子供の時に飼っていたライオンに、数年後に会

いに行ったら、喜んで抱きついてきたという話があるくらいだから。

小さな子猫

僕は子供の頃からイヌ派でした。今まで三匹飼って、そのうち最後の柴犬は、十八年半も生きました。ところが、昨年、うちの庭で子猫が生まれました。えさをやるうちに居着いて、慣れたらそのまま、うちの中で暮らすようになりました。最近はすっかりネコ派になってしまいました。猫の面白さは、飼ってみないと分かりません。

猫を飼う場合は、ペットショップなどではなく、保健所に保護されている子を譲り受けて下さい。せっかくこの世に生まれたのに、殺処分される不幸な子猫がたくさんいます。その子たちの命を救ってやって下さい。もし兄弟の猫がいたら、一緒に

もらって下さい。うちにいる二匹も兄弟です。一匹だとストレスがたまりやすいですが、二匹いれば猫同士で遊んでいてくれますし、猫の間のコミュニケーションも観察できます。猫はきれい好きなので、トイレを設置してやれば、必ずその中でします。あと、爪研ぎ用の用具も買っておいて下さい。

ただ、猫が大好きなのに飼えないという方も多いでしょう。先日、友人に猫のアプリを紹介されたのですが、その子猫が実に可愛らしいのです。本当に生きているように動き、愛らしい顔をしています。見ているだけで癒されます。本来は幼児向けのアプリなのですが、猫好きならば楽しめるでしょう。画面にタッチすると、いろいろな仕掛けで猫や、周囲の物が動きます。認知症のおばあさんなんかにもぴったりです。

iOS で動くアプリで、iPad なら十分に楽しめます。iPhone や iPod touch でも動きますが、ちょっと画面が小さいですね。かくれんぼすると、見えなくなってしまうので。

猫の耳

猫の耳といふものはまことに可笑(おか)しなものである。薄べつたくて、冷たくて、竹の子の皮のやうに、表には絨毛(じゅうまう)が生えてゐて、裏はピカピカしてゐる。硬いやうな、柔らかいやうな、なんともいへない一種特別の物質である。私は子供のときから、猫の耳といふと、一度「切符切り」でパチンとやつてみたくて堪らなかった。これは残酷な空想だらうか？

梶井基次郎(かじいもとじろう)の『愛撫』の冒頭である。確かに、猫の耳は特別な器官であって、犬にとっての鼻のようなもの。知覚にヒエラ

ルキーがあるとすれば、目なんかよりも鋭くて、人間の耳よりよっぽど敏感で、繊細に出来ているんだろう。

いつだったか、毛並みのいい子猫を見かけた。白に薄い茶の毛が混じっており、優美で上品な顔をしている。性格もおっとりして人なつっこい。地味だけれども、純真な子供のように美しい。

ある日、その子猫の右耳が「切符切り」でパチンとやられたみたいに、V字に切り込みが入れられていた。何てひどいことをするんだと僕は絶句した。放し飼いにされている猫は、喧嘩で耳を食いちぎられたりするが、それとは明らかに異なっている。他の猫を見てみると、やはり「切符切り」で切られたような切れ込みがある。

あとで知ったことだが、地域猫など放し飼いにされている猫は、避妊のために去勢されており、目印として耳の端を切り取られるそうだ。市場に売りに出された子牛のようで、部屋で飼われている猫には、決してこんな仕打ちはしない。

「自然の美に対する冒瀆じゃないか！」

去勢したという印なら、首輪でもつけておけばいいものを。こんなことを考えついた人間は、よほど動物への情愛が欠けているんだろう。

「身体髪膚、之を父母に受く。敢へて毀傷せざるは、孝の始めなり」というのは、戦後の教育を受けた人間には馴染みの薄い『孝経』の一節だ。最近では自らの耳に穴を開けてピアスを

通すのが流行(はや)っているが、孔子(こうし)がこんな習俗を見たら、道徳を知らない未開の民族だと嘆くことだろう。

ただ、世界各国にはさまざまな習俗があり、男の赤ちゃんの性器の皮を切り取る割礼(かつれい)なんて習慣も、中東やアメリカなどで現に行われている。新生児の場合は麻酔もかけないというから、これは麻酔をかけた猫の耳をV字に切り取るよりも残酷かもしれない。

耳の端に切れ込みを入れるのも、猫のファッションだと思えばいいじゃないかと、自分に言い聞かせようとしたが、どうしても納得がいかない。当の子猫の方は、耳の一部を切り取られたことなど、一向に構わぬ様子で、他の猫とじゃれ合っている。自身には見えないわけだから、首輪なんかつけられる方が、木

登りするときに引っかかって、よっぽど迷惑なのかもしれない。

野良猫も楽じゃない

近所のコンビニに、黒と白のまだらの猫が居着いた。いつもベンチの下に隠れていて、人が近づくと、相手の顔色を見る。真冬の夜は寒いから、かわいそうになって、コンビニで餌を買ってやった。恐る恐る近づいてきて、夢中になって食べ始める。

次の日の夜も猫はいた。こっちを見ているので、また餌をやってしまった。そんなことが続くうちに、猫は馴れてこちらを見ると、ニャーと鳴いて催促するまでになった。ただ、仕事のない日はそこを通らない。気にはかかっていたが、わざわざ餌をやりに通いはしなかった。

数日ぶりに訪れると、猫はやっぱりいた。コンビニで餌を買い、外に出てみると、何と先客がいた。先客といっても、猫に餌をやる先客である。猫はオスなのだろうか、いたずらっ子みたいな目が愛くるしい。だから、ぼくが通わずとも、他の人から餌をもらっていたわけか。

「今日はお腹いっぱいなんだろ」

帰ろうとすると、先客の餌を食べ終えた猫は、僕に近づいて物欲しそうな目で見ている。こうなると、もうやるしかない。猫は僕が与えたカツオも、ムシャムシャ食べている。

「かわいい顔してると得だよな」

年が明けて、久し振りにコンビニに行ったが、猫の姿はなかった。その代わりに窓には、「猫に餌をやらないでください」

という張り紙。猫が食い散らかしたりしたからだろう。コンビニなどではなく、一般の商店だったら、客寄せの招き猫として可愛がってもらえただろうに。

野良猫に餌をやると、数が増えて迷惑するという主張がある。確かにそれは言える。地域で世話している野良猫のことを、地域猫と呼んだりするが、去勢をして不幸な猫を増やさないようにしている。

日本ではいまだに、野良犬や野良猫は捕獲して、もらい手がいない場合には殺処分にしている。その話を留学生に話したら、顔が青ざめていた。アウシュビッツを連想したのだろうか。ドイツなどでは、飼い主のいない犬や猫は、保護施設で世話をされている。飼い主がいなければ殺してしまえという日本のやり

方に、批判のまなざしが向けられているというわけだ。

あの猫はどこかに行ってしまったのだろうか。餌をやると店先が汚れるという主張も理解できる。ただ、野良猫の立場になれば、人に媚を売るなどしても、生き抜いていかねばならないのだ。

行き倒れの猫

我が家の庭で生まれた子猫は、すっかり家猫になってしまった。家に入れる前は玄関脇に小屋を置いて、雨露（あめつゆ）をしのげるようにしていたのだが。子猫がかっていた小屋は、そのまま空き家となっていた。ある日、そこに一匹の老いた猫が、行き倒れのようにたどり着いた。

その猫は白と黒のまだらで、目つきはきついが、やせ衰えた上に咳（せき）をしていた。子猫たちはストーブの前でぬくぬくしているのに対し、あまりに対照的な身の上なので、妹は情けをかけずにはいられなかった。

キャットフードを与えた上に、寒いだろうと湯たんぽまでし

てやったのだ。体力が落ちていたので、与えた餌も食べきることができなかった。しゃがんで近づくと、野良猫らしく威嚇（いかく）の声を出した。それでも餌を食べることで、少しは体力を回復していき、昼間は庭でひなたぼっこをしていた。

「あの猫、まさか……」

「そうよ。子猫たちを追い払おうとしていた猫よ。あの頃はまだ肉がついていて威張っていたのに、こんなにやせ細っちゃって」

まだらの野良猫は、我が家の玄関先に居着いたように見えた。ただ、相変わらず食は細く、乾いたキャットフードは喉を通りにくいようなので、猫用の肉の缶詰に少しお湯を入れて、軟らかくして食べやすいようにしたら、喉を通ったらしかった。

次の日の午後、妹が水まきをしていると、猫はすうっと庭から出ていった。その日の夕方、餌の時間になっても現れなかった。そのまま、二度と姿を現さなかった。薄汚れて衰えたあの姿では、誰かに可愛がられてはいないだろう。

通りに出たまま力尽きたのか、自身の最期を人に見られたくなかったのか。なついたわけではなかったが、猫が消えたことはしばらく心に引っかかっていた。ただ、あのまま放置せずに、最後においしいものを食べさせてあげたことが、せめてもの慰めになったのだった。

猫の家出

うちの庭で生まれた二匹の兄弟猫を飼いはじめて、早くも二年半の月日が経っていた。白い毛の兄と、茶色い毛の弟は性格がかなり異なる。兄の方は猫らしいマイペース。遊んでほしいときは「遊んで、遊んで」と寄ってくるが、気が向かないときは、いくら声をかけてもそっぽを向いている。一方、弟の方は警戒心が強いのだが、甘えん坊でこちらが声をかけると、返事をしてくれる。

さて、先日、弟の方が家出をした。玄関が開いたわずかのすきに飛び出した。もとは外で飼っていたから、いつも窓際で外を見ていた。何度か逃げ出したのだが、夕方までには連れ戻し

ていた。ところが、今回はなかなか捕まらず、夜になってしまった。
　餌でおびき寄せたりしたが、玄関に入ったところで、ドアを閉めようとして、逃げられてしまった。それを繰り返すうちに、手の内を知られたのと、ドアを勢いよく閉めたことが、猫に恐怖心を与えたのだろう。これは危険なことで、下手をすると、ドアに猫がはさまって致命傷を負わせてしまう。
　こちらが声をかけると、返事をしてくれるのだが、ドアにはさまれそうになってからは、こちらに近づかなくなり、目が合っただけで逃げ出すようになった。動きもすばしっこくなり、野良猫の野生が戻ってきたかに見えた。ただ、鳴き声が悲鳴のようにも聞こえる。寒いからうちに入りたいのと、このまま自

由でいたいというジレンマにとらわれていたのか？
　そうして三日三晩が過ぎた。ストーブの前の席に座るほど寒がりなのに、霜が降りる寒さでどうしているのかと思った。餌と水は出しておいたが、十分には食べていなかったのだろう。三日目には寒さに耐えかねて、動きが鈍くなってきた。
　その日の夕方、庭の草の中にはまって、じっと震えていた。餌を口もとに持っていくと少し食べ、体にも触らせてくれた。タオルで包むように抱いて、家の中に戻すことができた。
　寒かったのだろう。クシャミをしていた。餌を食べると、疲れ果てていたのか、ストーブの前で眠り続けた。目が覚めると、元の甘えん坊に戻っていた。

しばらく、弟の猫は大人しくしていた。ただ、僕が勝手口から出ようとすると、ついてきてしまった。その目を見て、ぎょっとした。「今がチャンスだ」とでも言わんばかりに、目が怪しく光っている。脱獄の機会を狙っている囚人の目だった。

逃がすのはいつも、僕の妹である。忙しいと注意力が散漫になり、思わぬ失敗をしてしまうのだ。あれだけ気をつけろと言っていたのに、夏の朝、寝室に駆け込んで来るなり、弟の猫が逃げたことを告げた。

「バカじゃねえの！」

妹が出窓を開けて、網戸をするのを忘れたために、そこから逃げて行ってしまったとのこと。しばらく、猫は庭で遊んでい

たが、近づくと逃げ回るので、容易なことではつかまらない。

「私、仕事だから」と、猫のことは放って出かけてしまった。こちらは夏休みだから、任せられても文句は言えない。

「どうせ、餌の時間にならないと戻ってこないし」

いい気なもんである。僕が庭に出ると、猫は草むらの中で遊んでいる。セミが飛んでくると、捕まえようとジャンプしている。部屋の中と違って、日の光や風に当たれるし、虫や鳥を追いかけていた方が、楽しいに決まっている。

弟の猫は一向に捕まらない。以前真冬に逃げたときは、三日外にいて凍えて動けなくなっているところを捕まえた。今は夏だから、容易なことでは捕まりそうにない。

ところで、妹は友人と旅行する計画を立てていた。北海道に出発する前の日、ようやくあせりだした。自分が逃がした猫を放置したままでは、旅行を心から楽しむこともできないからだろう。

日暮頃に僕が帰宅すると、猫は自動車の下に隠れており、妹は下を覗き込んで必死に呼んでいる。道路の方に逃がすまいと、駐車場の出口で身構えることにした。ふいに白と茶のまだら猫が現れた。この猫はしばしば庭に現れ、以前弟の猫がちょっと外に出てしまったときにも、鼻を突き合わせて挨拶していた。毛並みが兄の猫に似ているから、うちでは妹の猫と見なしていた。弟の猫を玄関の中に入れた後には、「あっ、入っちゃった」とでもいうように、悲しそうな目をしていたのを覚えている。

妹の猫は「お兄ちゃんが危ない」とでも思ったのだろう。助太刀(すけだち)に駐車場に入り込み、そのまま弟の猫を連れて道路に出てしまった。これで捕まると思ったのに。二人ともがっかりしてしまった。

すっかり暗くなってから、弟の猫はふたたび庭に現れた。僕はすかさず、焼きガツオを人間の妹に手渡した。日本の猫は肉よりも、魚が好物であることが多いからだ。

僕が居間で食事をしていると、「あっ」という声とともに、何かが倒れた音がした。僕が駆け寄ると、妹は地べたから立ち上がった。

「カツオだけ食い逃げされた。iPhone 大丈夫かしら」

iPhone のライトで照らしていて、手にしたたまつんのめった

ので、画面に傷がついたのではないかと、しきりに気にしていた。

妹は弟の猫のことを放って、北海道に行ってしまった。初めの頃は昼間も庭で遊んでいた猫だが、お腹がすかなければ寄っても来ない。逃げ回る弟の猫を見て、きっと脅えているんだろうと思った。捕まえよう、捕まえようという意識が、猫には殺気として伝わっていたのではないか。

どうせ自分一人では捕まえられないわけだし。妹が旅行している間は、ひとまず餌だけ与えることにした。猫の猜疑心（さいぎしん）を解き、親しみを蘇らせることが先決なのだろう。

朝と夕方、いつも餌をやってる時間に、弟の猫は現れた。皿

に餌を入れてやると、恐る恐る近づいてきて、一口くわえて一メートル離れたところで食べた。ちょっとショックだった。これじゃまるで、野良猫と見知らぬおじさんみたいじゃないか。

次は餌を皿に置いたままにして、うちの中から覗くことにした。窓をそっと開けたら、微かな音を聞きつけて、猫は逃げてしまった。これは重症だなと思った。

そこで、餌を庭先に置いて、一メートル離れ、壁に寄りかかってそっぽを向いていた。猫は恐る恐る近づいてきて、こちらに警戒しながらも、餌を食べるようになった。この調子で慣らしていけばいいんだな。

妹が北海道から帰ってきた。僕は猫を脅えさせないように、

しばらく餌だけやって、一緒に遊べるようになったら、家の中に入れればいいと言った。一旦は賛成した妹だが、ほどなく獣医のところに相談しに行った。

「私、疲れちゃった……」

電話をかけてきた妹は、野良猫みたいになった猫を、また飼い猫の状態まで戻すのに、気が遠くなってしまったらしい。すぐに庭に出たがる猫は、容易なことでは捕まらないだろうと獣医に言われ、罠で捕まえようと持ちかけてきた。

猫との信頼関係を取り戻すことを考えていた僕は、騙して捕まえるという方法は気が進まなかった。とはいえ、いつ捕まるという当てもないので、試してみればいいと答えた。

早速、妹は猫を捕獲する罠を借りてきた。鉄製の檻の奥に、

斜めに延びた棒があり、そこに餌を挿しておく。魚の肉は軟らかいので、食い逃げされてしまう。鶏の唐揚げはよく匂うし、突き刺さっていると、なかなか抜けない。取ろうとして引っ張ると、入口の蓋が閉まる仕組みになっている。

夕方、罠を仕掛けておいた。弟の猫は近寄ってきた。唐揚げが匂うのか、入口から中を覗いている。でも、何だか怪しいと思ったのか？　実は子猫の時代に、母猫を捕まえて避妊しようと妹が言い出し、庭に罠を仕掛けたことがあるのだ。一回目は食いしん坊の兄の方が捕まり、二回目は母猫が捕まったものの、罠を持ち上げた途端に、入口をこじあけて逃げてしまった。

あれから三年近く経つが、もしかすると覚えていたのかも？　同じ手には乗らないぞとでも思っているのか。

「よほど飢餓状態にでもならないと、罠に引っかからないわ」
日が暮れてしまった。妹はため息をつくと、家の中に入ってしまった。僕は蚊に刺されながら、家の陰から罠の方を観察していた。暗がりから猫が、再び近づいてきた。入口に足を入れようとしている。でも、よく見ると、妹、妹の猫じゃないか。妹が捕まったところを見たら、弟の猫は絶対に罠にかからないだろう。
「こらっ」
怒鳴った途端、妹の猫の後ろにいた弟の猫も逃げてしまった。
翌朝も罠を仕掛けたが、弟の猫は一向に入ろうとしない。猫が罠にかかったところを覚えているのか、極度に警戒心が強い

のか、ただ単におびえているのか。早くも妹の方があきらめ顔になった。手なずけるのも駄目で、罠も駄目となると、もはや手詰まりの状態である。あとは猫の気持ち次第か。
夕方には、罠を仕掛けることもやめてしまった。猫を呼ぶと近づいてきたので、今までのようにちょっと離れて餌をやった。食べ終わった弟の猫は、ゆっくり立ち上がった。いつもはすぐに、門の方に去ってしまうのだが、今日はなぜか玄関の方に歩いてお座りした。
もしや、家の中に入りたくなったのか。微かな希望が湧いてきた。ただ、玄関を開けようとしたら逃げてしまった。
次の日は土曜で、午前中は僕がうちにいた。弟の猫はやって来ると、餌を食べて立ち去った。まだ近くにいるんだろうと見

回すと、お隣の芝生でひなたぼっこしている。いい気なもんだと思った。少ししてから庭に出ると、物干しのそばのコンクリートで、足を投げ出して休んでいるじゃないか。

　これはチャンスだと思った。いったんうちの中に入り、兄の猫をリビングに閉じ込めた後、玄関のドアを開けっ放しにした。そろそろと近づき、弟の猫の体を撫でた。何だか元気がない。連日のように夕立に遭い、今日はコンクリートに座ったまま、熱中症にでもかかったのか。すぐに立ち上がれまいと思った。すかさず、猫を両手で抱え込んだ。多少抵抗されたが押さえ込み、玄関のドアを閉めてから下ろした。

　猫は十二日間も外泊していたせいで、野生の臭いがした。リビングに入れられて、赤ん坊のような声で、オス同士威嚇し合

うときみたいに、数分間抗議していた。

　どうして中に入れちゃったのと言わんばかりに。少しして、兄の猫が寄ってきて、弟の臭いをかいでいる。

「おまえ、随分いなかったじゃないか」とでも言ってるのか。弟の猫はすぐに大人しくなり、毛づくろいをしている。いやな臭いも次の日にはなくなり、以前のように甘えてきたが、風邪気味だったのだろう。口を大きく開けても、声がかすれてしまう。ニャーンと鳴けるには、二週間ぐらいかかった。